

重瞼術などの術後の眼瞼痙攣、 体調不良に対する手術治療について



形成外科 部長 手塚 敬

今年の形成外科学会のテーマは「リカバリー」でした。パネルディスカッションに「後天性眼瞼下垂術後のトラブル・不満足な結果に対するリカバリー」というものがありましたので、演題と討論に応募して参加してきました。

重瞼術の多くは皮膚の針穴から結膜まで糸を通して締める方法をとります。高いところにこれを行うと瞼の裏側にあるミューラー筋という筋肉を締め付けることとなります。また、他院で行う眼瞼下垂の手術ではあえて目を開く筋肉の動きを大きくするためにミューラー筋を縫って緊張させる方法もありますし、5年ほど前までは当院で行っていた眼瞼下垂手術でも、わずかな確率でミューラー筋に糸が引っかかることがありました。ミューラー筋

の中には眼瞼周囲の反射性の運動、脳の覚醒、自律神経などを司る固有感覚というセンサーがあり、これが不必要に引っ張られるので過剰な反応が起こります。

人によって症状は異なります。目が開きすぎたり、逆に眼瞼痙攣で開きにくくなったり、頭痛、肩こり、身体の痛み、不眠、まぶしさ、といった自律神経失調などが起きます。術後すぐにこれらの症状が出ることもあれば、何年もかけて緩やかに起こってくることもあり、術前にもともとあった症状が、より強くなったというケースも多いです。

今まではこれらに対する修正手術の結果は思わしくありませんでしたが、この数年、手術の改良によって、ようやく成

績が向上してきました。今回のディスカッションのパネラー6人のうち、私を含めた3人がほとんど同じ内容でした。患者さんが多くて症状が重い、しかし修正方法も確立されてきたということです。

もし、身近な人で眼瞼の術後に体調不良になり、悩まれている方がおられましたら、眼瞼下垂外来（完全予約制）受診を勧めてみてください。限界はありますが、「リカバリー」できる可能性があります。

注：当院での治療は身体の不調を軽減させるためのものです。重瞼幅の変更、一重（ひとえ）に戻りたいなどの美容的な修正は行っておりません。

海外出張報告

2018年3月
in
グルガオン

第9回頸椎研究会議アジア太平洋部門

(CSRS-AP : Cervical Spine Research Society

Asia Pacific Section) に参加して

整形外科 副医長 住吉 範彦

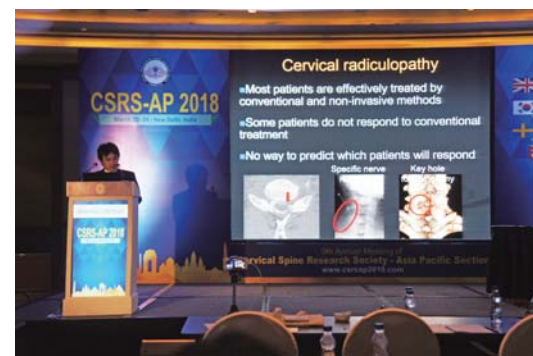
この度、2018年3月22日から3月24日までインドのグルガオンで開催されました第9回 Annual Meeting of Cervical Spine Research Society Asia Pacific Section (CSRS-AP)に参加してきました。グルガオンは首都ニューデリーの南西に位置し、10年ほど前は砂漠だったようですが、デリー近郊の衛星都市として急速に発展し、現在は高層ビルが建ち並ぶビジネス都市となり、多くの日本人も仕事をしているとのことでした。

CSRS-APはアメリカでのCSRS本会、そしてCSRS-European sectionをsister societyとして、アジア・太平洋地域での頸椎研究を目的に2010年に設立された学会です。

今回は第9回目のAnnual Meetingで、初のインドでの開催でしたが、日本からも著名な先生方が多数出席され、貴重な講演も行われていました。

私は、「Relationship between cervical radiculopathy and F-waves in upper extremities (頸部神経根症と上肢F波の関連性について)」という演題名で口演発表させていただきました。頸部神経根症は上肢の痛みやしびれ、筋力低下などを生じ、症状が継続または増悪し、手術を要する例もあります。その予後予測の確立された方法はないため、特に仕事や家庭の事情で早期の回復を希望される例では、発症早期に手術治療を行うかどうか迷うこともあります。電気生理学的検査で得られるF波を解析することで、頸部神経根症の予後を予測することが有用である可能性があり、今回の学会で発表させていただきました。

著名な先生方は海外での学会でも発言力があり、積み重ねてきた知見からの意見を述べられ、海外の先生方も熱心に耳を傾けられてい



ました。私も海外の学会でも臆することなく、論理的な意見をしっかり説明できるよう、今後も励んでいきたいと思えます。フロアでは日本の先生方だけでなく、海外の先生方の意見や考えを聞くことで交流を深めることができました。

今回この貴重な学会参加を許可して下さった山本院長、留守の間ご迷惑をおかけした整形外科の先生方に感謝いたします。今後とも地域医療に少しでも貢献できるよう努力しつつ、世界に情報発信し、松山市民病院も国際レベルの医療が提供できる施設であると認められるよう精進していきたいと思えます。

